

第 1 章

ギッシングの生涯

(The Life of Gissing)



1990 年当時のウェストゲイト通り 60 番地（ギッシングの時代は 55 番地）
中央の建物 (Britannic Assurance) は 2003 年 8 月現在リフォーム中で、“The
Cave” という名前のレストランになる予定。その右隣（一階が父の店）の上の
階でギッシングは生まれた。右端の少し高い建物は銀行。

従来、ジョージ・ギッシングはエッセイ集『ヘンリー・ライクロフトの私記』の著者としてしか知られていなかったが、今ではヴィクトリア朝末期の重要な小説家の一人として高く評価されている。彼の名声は1880年から1903年の間に相次いで書かれた小説によるものだが、その大半は当時の産業社会における不正の数々をリアリスティックに暴き出した作品である。都市における貧困の情景が頻繁に描かれた初期の作品群を読むと、彼はスラム街の小説家ではないかという印象を受ける。しかし、彼は作家活動の後半において小説の舞台を中流階級に変更し、作家として成熟した技量を駆使して普通の社会を全体的に批判するようになった。ギッシングは個人の生活と公的な問題とを結び付け、傷つきやすい若者が社会の力によって犠牲となる様子を独自の才能で描いてみせた。こうしたアプローチによって彼は、貧困、女性の社会的制約、結婚問題、現代文明の卑俗性、文学の商業化といったテーマを論じたのである。

ギッシングは宗教については不可知論者、社会改革については懐疑論者であった。小説で扱う問題に対しては、いつも反大衆的、悲観的、そして宿命論的とさえ思える立場をとった。芸術や学問に象徴される人間の高尚な能力は、民主的な社会における金銭欲や大衆文化に埋もれてしまわざるを得ない。彼は心の中でそう思っていた。19世紀末期を病んだ状態にしていた社会問題がギッシングに与えたものは、激情や迷信を排した文明や教養を基盤とする文明が生まれる見込みはないということを示すための材料であった。社会状況を観察して強い不満を覚えていたからこそ、彼は苦境に陥った当時の人々の心を洞察する類まれな力を養うことができたのである。

ジョージ・ギッシングは地方の中流階級の出身である。父はヨークシャー州の町、ウェイクフィールドの中心街に薬剤師として店を構え、その上の階に住んでいた。¹ ギッシングは長男で、下には4人の弟妹たちがいた。² 彼は地方の学校に通っていたが、³ 13歳の時に父が死ぬと、⁴ チェシャー州のリンドウ・グロウヴ・スクールへ行かされた。⁵ そして、その2年後にはマンチェスターのオーエンズ・カレッジに入学することになる。⁶ 彼の文学趣味は在学中に鮮明な形をとるようになった。子供の時に詩を書いたこともある彼は、学校で古代と現代の言語と文学を学んだが、この時期に彼はギリシャとローマの文化についての知識を得たのである。そして、それが彼の一生の関心事となり、楽しみの最も深い源泉となった。彼は熱心に勉強する学生で、先生からは高い評価を受け、数多くの賞や奨学金を獲得するなど素晴らしい記録を達成していた。資格を取得したあとはオックスフォードかケンブリッジに進

み、おそらく学問をずっと続けるだろうと思われていた。

しかし、そうした経歴は彼がオーエンズ・カレッジの最終学年を迎えた 18 歳の時、すなわち 1876 年の春に生じたショッキングな事件によって途切れてしまう。彼は「ネル」と呼ばれていた 17 歳の娘と恋に落ちていたが、この娘は貧しくて家族もなく、よくカレッジ近くのパブなどに行っては、自活のために春を売ることがあった。⁷ 彼女が街の女にならず正直に働いて暮らせるようにしようとするあまり、ギッシングはカレッジのロッカー室から書籍、金、衣類を盗むという切羽つまった方策に出た。⁸ それで、逮捕されて放校処分となり、1 ヶ月の監禁と共に重労働を課されることになった。釈放されたのち、彼は恥辱を受けた場所から逃れるために、1876 年 9 月になってアメリカへと渡ることになる。⁹ この事件はギッシングの人格と作品に甚大な影響を及ぼした。彼は学術的な人生を歩む可能性を断たれ、社会から追放された人間（エグザイル）としての生活を余儀なくされ、自らをアウトサイダーとして見るようになったのである。更に重要なことに、普通の道徳基準に対する弁護の余地がない違反行為によって罪の意識が生まれ、それが彼の自滅的な行動と絶望的な人生観を形成する原因の 1 つとなった。



Marianne Helen Harrison ("Nell," 1858–88)
Gissing's first wife (c. 1880)

ギッシングのアメリカ生活は 1 年あまり続いた。それは心が休まることのない国外追放の時期であったが、逆説的に言えば彼がささやかながらも最初に文学的成功を収めた時期でもあった。ボストンで 1 ヶ月を過ごし、そこで

地方の定期刊行物に生まれて初めての記事——美術館で見た何枚かの絵画についての記事——を出したあと、¹⁰彼はマサチューセッツ州のウォルサムに移り、高校教師の地位を得てフランス語、ドイツ語、英語を教えた。¹¹1877年3月、彼は突如としてシカゴに移ることになる。¹²そこで金に窮した彼は多くの短篇小説を書き、なんとか『シカゴ・トリビューン』やその他の定期刊行物に買い取ってもらった。¹³これはギッシングにとって文字どおり小説家としての第一歩であった。このことやこれに続くエピソードについては『三文文士』に詳しいが、この小説ではギッシングのアメリカでの体験がウェルプデイルという人物にあてがわれている。7月になると彼はニューヨーク・シティーに移動する。そして、トロイの新聞社が彼の物語の1つを無断で掲載したことを知り、そこへ行けば雇ってもらって更に書けるだろうと思った。¹⁴しかし、彼は無残にも追い返され、旅の写真屋のアシスタントとして数ヶ月ニューイングランドを放浪したのち、9月になってイングランドへ帰国することになる。¹⁵

ギッシングはロンドンで安い下宿を渡り歩いたが、まもなくそこへネルが加わったので、1879年に彼は彼女と結婚した。¹⁶この時期のことは『ヘンリー・ライクロフトの私記』に描かれている。その日暮しの貧困状態にあった彼は、時たま見つかる家庭教師の仕事や他の不定期な仕事で生活しながら、真剣に小説の創作に励んでいた。結局、この最初の小説の原稿を出版してくれる業者は見つからなかった。それで彼は別の小説を書いたが、またもや出版拒否の憂き目にあったただけであった。1880年、この2番目の努力の結晶を、彼は『暁の労働者たち』というタイトルで、父から譲り受けた遺産を使って自費出版することになる。この本はほとんど売れなかったし、注目を浴びることもなかったが、その1冊を彼は実証哲学協会のフレデリック・ハリソンに献本していた。¹⁷

この頃のギッシングはコントとその実証哲学に熱中し、¹⁸ハリソンの論文を熱心に読んでいたのである。『暁の労働者たち』のヒロインは、伝統的なキリスト教の信仰に代わるものの1つとして、実証哲学に救いを求める人物なので、このような側面にハリソンが興味を覚えるかもしれないとギッシングは思ったに違いない。実際、ハリソンは作品のアイディアに異を唱えたものの、強い印象を受けて賞賛の手紙を寄越してきた。ハリソンはまたギッシングをジョン・モーリーやその他の文人たちに紹介し、¹⁹自分の二人の息子のために彼を家庭教師として雇ってくれた。

『暁の労働者たち』は社会に対する抗議の書である。事件、登場人物、きわどい場面などが多すぎ、まとまりがなくて軽妙さに欠けるものの、それでも

貧困の描写は作者の強烈な憤りを伝えているし、彼が社会改革に関する当時の最新理論の幾つかを知的にしっかりと理解していることはよく分かる。ギッシングは自分の経験を活用し、ロンドンのスラム街で生まれた若者、アーサー・ゴールディングの身の上話をするが、この若者は画家になりたい気持ちと労働者仲間のために政治活動に献身したい気持ちとの板ばさみになる。酒に溺れた若い街の女、キャリー・ミッチェルを救って更生させるために彼がしてやった結婚は、明らかにギッシング自身が結婚した状況を反映したものである。ネルはアルコール中毒者であったし、彼女の体の病氣、落ち着きのなさ、反抗的態度のせいで、ギッシングの生活は見るも無惨なものであった。これらの苦しみを利用し、彼女を小説の最も力強い場面の中心に据えたのは、作者の特性をはっきりと示している。やがてゴールディングは中流階級の娘、ヘレン・ノーマンに恋するようになるが、彼女は芸術と政治それぞれの目的が互いに両立し得ることを彼に悟らせる。小説では貧者が抱える問題への解決策が数多く検討されるが、どれも役に立たないように思える。結局、またもギッシングの生涯を順番にたどるように、ゴールディングは最終章でアメリカに渡り、しばらくしてナイアガラ滝に身を投げて自殺することで、物語は終わりを告げる。のちにギッシングが認めたように、この小説の形式はリアリスティックな描写、入り組んだ心理分析、作者の注釈、多数のプロットなどの点で、ジョージ・エリオットの小説を模倣したものにすぎなかった。

『暁の労働者たち』の失敗にもかかわらず、ギッシングがハリソンを通して知り合った人々は、彼にジャーナリストとしての仕事を提供してくれたので、その前途は洋々たるものに思えた。しかし、彼はそうした機会の大半を捨て、家庭教師で糊口をしのぐことで、安い下宿で精力的に小説を書き続けながら、蜚雪の作家としての生活に拘泥した。一緒に下宿していた妻はスラム街の近所で揉め事をしばしば起こしたが、こういった妻の行状を含めて彼には聞わねばならないハンディキャップが数多くあった。しかしながら、この時期に彼の一生に及ぶ2つの交友関係が形成された。1つは、1884年にドイツへ帰国してから作家となり、ギッシングが死ぬまで文通をしてくれた亡命中の社会主義者、エドゥアルト・ベルツとの関係である。²⁰ もう1つは、オーエンズ・カレッジ時代からの学友、モーリー・ロバーツとの関係で、²¹ 彼もまた小説家となり、のちにギッシングを小説化した伝記『ヘンリー・メイトランドの私生活』を書くことになる。²²

1882年頃、ギッシングはもはやネルと一緒に生活することはできないと思

い、定期的に手当を少し与えることによって、彼女を他所で生活させるようになっていた。²³ この時期に様々な苦勞を味わったにもかかわらず、彼は幾つかの短篇小説と中篇の物語を書いていた。どれも出版まで漕ぎ着けることはできなかったが、幸運なことに彼の小説『無階級の人々』がチャップマン・アンド・ホール社の原稿閲読者、ジョージ・メレディスに評価された。²⁴ メレディスはギッシングの独創的ではあるが判然としない物語の長所を読み取ってくれたのである。そして、彼に忠告して幾つかの修正を施させ、1884年2月に小説の出版許可を与えた。

売れなかったとは言え、多くの作品を書くことで、明らかに幾らか上達していたギッシングは、『暁の労働者たち』には見出せない制御されたまとまりを『無階級の人々』で見せるようになっていた。限度を設けてテーマと登場人物の数を減らし、社会への抗議をじかに表現するのではなく、物語の一部として組み入れながらハッピー・エンディングに到達している。主人公のオズモンド・ウェイマーク——ロンドンのスラム街に住む貧乏な若い知識人で、作者の社会理論と芸術に関する考えを共有し、容姿も作者によく似た売れない小説家——は、ギッシングが描いた中で最も彼の自叙伝にふさわしい人物である。ウェイマークはまたギッシングの性的なジレンマを受け継いでいる。つまり、中流階級の立派な女性、モード・エンダビーとできれば結婚したいと考えている一方で、(ネルを理想化した人物であることは間違いないが)とても実在するとは思えない聡明かつ利他的な街の女、アイダ・スターにも惹かれているのである。ギッシングはウェイマークと彼の友人たちを通して、彼のように才能ある若者に適当な機会を与えない当時の競争社会を攻撃している。物語が進むにつれ、最初は理想主義者だったウェイマークは、スラム街とそこに住む人々が救いがたいことを思い知り、芸術は私情を離れて客観的になるべきだという見解が変わる。そして、『困窮は現代生活の基調である』(第20章)という理由で、芸術は困窮の代弁者でなければならないと主張する。とは言え、この小説は楽観的な結末を迎える。アイダ・スターは濡れ衣を着せられて監禁されたのち、スラム街を所有する裕福な人の孫娘であったことが判明し、その人の財産を相続する。そして、貧者に施しをする慈善家となり、彼女に助けを求めるウェイマークを受け入れてやる。

これら初期の作品群でギッシングは貧困を排撃しているが、逆に貧者自身に対しても相当な敵意を表明している。彼はロンドンに住み始めて数年の間、自らを受けた幻滅を社会観察者として記録していた。最初は理想を追うように貧しい人々を描いていたが、芸術、学問、古代文明を愛する自分の心を

労働者たちに共有させることはできないと間もなく思うようになった。労働者たちはスラム街で身に着けた生活様式をどうしても続けようとしたからである。それゆえ、彼は社会批評家としてのスタンスを変え始めた。今では貧困を読者の目にさらすことへの興味が薄れ、スラム街の粗暴さと中流階級の無教養さの両方から生まれる脅威に対して、知性に基づく価値観を擁護することに関心を覚えるようになったのである。そして、自分が本当に扱うべき主題は無産階級の人々ではなく、産業社会での競争にふさわしい知識を備えていない聡明な若者であることを悟るようになる。数年後、彼はモーリー・ロバーツに手紙を書き、「私の作品で最も特徴的な、最も重要な部分は、私たちの時代に特有の——十分な教育を受けて育ちもいい、しかし金がない——階級の若者たちを扱っている部分なのです」と語っている。²⁵

1884 年頃にはギッシングの収入も増え、彼の最初の定まった家となるアパートをリージェント・パーク近くに借りることができるようになっていた。²⁶ 彼は家庭教師をしていた裕福な人々の田舎の屋敷へ行くたびに、どういふ環境が教養に基づく価値観に適しているかということが分かるようになった。このあとに執筆された小説群は、そうした種類の場面設定に基づき、貧困と特権それぞれの世界の相互作用を中心に展開している。ギッシングは若者たちが結婚して地主階級に入ることによって都会生活から逃れようとする 3 篇の物語を書いた。『イザベル・クラレンドン』は、ロンドンの喧騒を逃れて田舎の小さな家に慰安を求め、近所に大邸宅を所有している裕福な若い未亡人に恋する文学青年の物語である。しかし、結婚によって精神的な生活という理想を成し遂げることなく、彼は挫折を味わって商売の道へ進み、本屋として生計を立てねばならなくなる。『人生の夜明け』では、貧乏な若い女家庭教師が金持ちの子供たちを世話することで、ギッシング自身と同じように田園生活の甘美さを発見するようになる。彼女は狭い家の生活から離れ、設備の整った趣きのある大邸宅の整然とした環境に身を置く時、喜びと心の落ち着きを感じる。結局、彼女と家庭教師先の息子との婚約は妨害されることになる。それは、彼女の父が犯した窃盗の罪をばらすぞと脅すことで、父の雇主が彼女を無理に結婚させようとしたからである。彼女の父は世間の悪評というプレッシャーに耐えられずに自殺する。その結果、ヒロインは結婚することができず、6 年後たまたま昔の恋人と再会するまでは、切望していた自己修養の生活を始めることもできなくなる。

『人生の夜明け』は 1885 年に完成したが、1888 年までは出版されなかった。しかしながら、その頃までにギッシングは他に 3 つの小説を書いて出版

していた。その最初の小説『民衆』は、人間を墮落させる悪影響が下層階級の生活の中にあることを大胆に論じており、続いてそうした議論の社会的、道徳的、政治的な意味が暗示されている。聡明で若い社会主義の指導者、リチャード・ミューティマーは財産を相続し、自分が所有する工場を社会主義的な生産方法に切り替え、結婚によってより高い社会階級に属すようになる。しかし、彼は下層階級出身という負い目によって生まれる性格的欠陥を克服することができず、妻の愛を引き留めることも、社会主義運動をコントロールし続けることも、作品のプロットによって自分がさらされる道徳的試練を乗り越えることもできない。新しく発見された遺書によって彼は財産を奪われ、貧困に陥った挙句の果てに、暴徒と化した自分の追従者たちが投げた石に当たって死んでしまう。小説の終わりでは、彼の工場によって神聖を汚されていた田舎の景色が、再び以前の美しさと静けさを取り戻す。

おそらく『民衆』はギッシングが自分の才能に対する全幅の信頼を示した最初の小説であろう。彼はリアリスティックな描写、心理分析、雰囲気と趣きの設定を含めた広範囲に及ぶ技術を駆使し、多種多様な場面と人物を十分に発展させた。ロンドンに住む貧民の生活に関する記述は非常に詳しく信頼性があり、そこでは少なからぬ同情が表明されている。実際の観察に基づく社会主義者の集まりについての描写は活気と生彩に富む。この小説は全体として政治的な陳述を(多少は常軌を逸しているにせよ)力強く行なっている。そして、教養に基づく価値観の保護と芸術至上主義についての貴族的な考えに賛同している。ストーリーと人物描写の本質的な力強さ、そして最新の社会問題に関する論じ方ゆえに、『民衆』は一般読者だけでなく批評家に対しても目覚ましい成功を収めた。匿名で出版されたにもかかわらず、すぐにギッシングの作品であることが知れ渡り、彼は当時の文学界で真剣に取り上げられるべき小説家としての地位を確立した。

メレディスはギッシングに「下層生活の場面」を切り捨てないように忠告していたが、²⁷ この題材を『民衆』で扱って成功したことで、ギッシングはメレディスの言うことが正しかったと確信したに違いない。と言うのは、彼の次の小説『サーザ』は、その舞台の大部分がロンドンの貧しい地区であり、そこでは労働者たちの生活について洞察と理解に満ちた描写がなされているからである。ヒロインは理想化された労働者の娘で説得力に欠けるが、彼女を愛する男——本に熱中する工場労働者で、単調な労働の生活から自分が決して逃れられないことを知っている——ギルバート・グレイルは、ギッシングが描いた中で最も本物に近い、最も哀れを誘う人物の一人である。一方、男性の主

人公ウォルター・エグレメントは、教養と啓蒙運動を広めるためにスラム街に来てヒロインを恋するようになる地主階級の一員で、この小説の主題は彼の体験の中に具現化されている。ギッシングの初期の小説に見られたように、階級間の境界を越えた愛は破滅する運命にある。貧乏人は救済できないこと、サーザと結婚するのは間違いだということ、つまり社会のそれぞれの階層は他と交わらず、自分の階級の流儀に従うべきだということにエグレメントは気づくようになる。小説の終わりで、彼は自分と同じ階級の娘との結婚を決意するが、彼が捨てざるを得なかったサーザの方は悲嘆に暮れて死んでしまう。

ギッシングがペースを崩さずに仕事をする非凡な人であったことは彼自身の日記で理解できる。1つの小説を完成するとすぐに新しい小説に着手し、作品の計画を練るか、実際に書き進めるか、そのどちらかを必ず毎日していたのである。しかし、彼は執筆の動機不足、決断力のなさ、自信の欠如で苦しんでいた。ある案から別の案へ変更したり、書き上げた多くの章を破棄したり、完成した本を公にしない場合さえ頻繁にあった。1887年に『サーザ』を仕上げたあとも、決断力のなさゆえに特に苦しんだ試練の時があった。いつものように彼は着々と書き続け、次の14ヶ月の間に4つの小説を完成、またはほとんど完成したのだったが、その期間に書かれたものは結局どれも出版されることがなかった。この時期のフラストレーションは、1888年2月29日にネルが死んだという通知を受けると同時に、終わりを告げることになる。²⁸ 葬式の準備に行くと、彼は彼女が凄まじい貧困生活を送っていたことを知った。彼女が住んでいた汚い部屋に横たわった遺体を見た時、彼はロンドンでの青春時代に体験した、あの社会的な不公平に対する憤りと絶望が再びよみがえってくるのを感じた。その後すぐに、彼は貧困を扱った最後の、最も悲観的な小説を書き上げることになる。

この小説『ネザー・ワールド』に貧富のコントラストは見られない。これはスラム街の生活についてのイメージを単調に積み上げた作品で、幾つかの貧困の段階がはっきりと示されているが、最終的に受ける印象は人を押しつぶすような絶望感である。貧しい人々は仕事探しによって、犯罪によって、政治運動によって自分たちの窮状から逃れようとし、無関係な人々は慈善と教育によって手助けをしようとする。しかし、スラム街で育まれる悪しき性格は根絶できないし、そういった人々は飲酒、暴力、残虐行為、不正行為によって自らの環境を地獄のようにしてしまう。勇気と力を出して苦闘する人物たちは、そうしたスラム街を支配する悪の力にかき消されてしまう。この

小説をギッシングは強力な動機に支えられて書いたのだが、最初に小説を書き始めた若い頃のように、自分の感情を耳障りな抗議と共に表出するのではなく、それを文学作品の創作面の方へ向けることで、洗練された新たな素養を見せることができるようになっていた。スラム街の情景とそこに住む人々が、忍耐強い観察による正確な筆致で活写され、環境と経験の人格に及ぼす影響が論理的に述べられ、下層階級の生活水準が数多くの雄弁な描写を通してはっきりと示されている。

1888年9月26日、過去8年に及んで途切れることなく仕事をしてきたギッシングは休暇を取り、多年の願望を遂げて5ヶ月の大陸旅行に出かけた。彼の伴をすることに決めていた無愛想な知人と一緒にパリで1ヶ月を過ごしたのち、彼は一人でナポリ、ローマ、フィレンツェ、ヴェニスを旅した。²⁹ギッシングがイタリアに心を惹かれた主な理由は、古代ローマと関連のある遺跡や廃墟にあった。彼はルネッサンスの芸術や建築に敬意を払っていたが、そうしたものはローマの名所旧跡に比べると意味がないと主張している。とは言え、彼はまた旅行した当時のイタリア人の生活を楽しんで観察し、街の人々の活動や日々の行動について事細かく日記に書いていた。

このイタリア訪問は彼の作品に対して即座に影響を及ぼした。彼は次の小説『因襲にとらわれない人々』でイタリアの情景を幾つか利用したが、旅行の結果として更に重要なのは、彼の作家人生における主要な2つの時期が画然と区分されたことである。この旅を終えてからのギッシングは、その時まで彼の主たる強力な武器となっていた貧困についてのリアリスティックな描写を捨て、中流階級の生活を扱う小説へと転向した。まだ社会情勢には関心があったものの、産業化が進んだ民主的な社会の諸問題に直面していた中流階級の人々について、その心理分析に焦点を定めるようになっていた。それと平行して彼の文体にも変化が現われた。貧困を描く際に付随して生じる激しい憤りと無言の絶望感を反映した文体を捨て、無色透明なリアリズムという控え目で客観的な文体を創り出したのである。この文体は平坦な陳述から穏やかな皮肉まで多岐に及び、社会批評の痛烈な媒体として役に立ち得るものであった。『因襲にとらわれない人々』は、イタリアを旅行できるほど裕福で、道徳や美や宗教における伝統的な規範に対して、様々な方法で反抗する人たちを取り上げている。中心人物の一人は福音主義派の狭い社会出身の若い未亡人で、イタリアでの文化的な経験によって美的感覚や愛に対して心を開くようになる。これと左右対称をなす人物としては、十分な教育を受けて自分の好きな時に自由に結婚する「伝統にとらわれない」若い女性がいるが、

この自由を彼女は無分別に行使してしまう。このような女性の二分法はギッシングの小説でますます顕著になりつつあったテーマ、すなわち女性の社会的地位という問題を提起している。

このテーマを彼は次の小説で扱うつもりだったと思われる。なぜならば、『因襲にとらわれない人々』の完成後、彼は「女校長」という物語の計画を立て、³⁰ 大英博物館で女性に関する文献を読んでいたからである。1889年11月11日、その物語を完成する前に彼はロンドンを発ち、2度目の地中海旅行に出かけてしまった。今回は最初にギリシャへ行き、アテネで1ヶ月ほど過ごしてからナポリを再訪し、そこに翌年2月20日まで滞在した。彼がナポリにいる間に、結果的に彼の死因となる肺病の兆候が初めて出たので、下宿のベッドで1週間ほど過ごさねばならなかった。1890年の3月初旬にロンドンへ戻ったのち、直ちに彼が創作を始めたのは「女校長」ではなく、最終的に『三文文士』というタイトルになる小説であった。しかし、彼は何ヶ月も筆を進めることができず、ある案から別の案へ変更したり、何ページも破棄したりする有様で、日記には「絶望」や「精神錯乱」さえ感じることがあると書いている。³¹ 彼はいつも孤立した生活に慣れていたが、孤独感でひどく苦しむことがあった。不幸な気持ちが激しくなるあまり、手際よく仕事ができないこ



Edith Underwood (1867–1917), Gissing's second wife

とがあつたのである。小説だけでなく手紙の中でも、彼はしばしば自分自身の問題について、教養があつても貧乏な男は自分と同じような女性が貧困を共にしてくれるなどと期待すべきでないと語っている。³² そうした見解は結婚についての彼の考えを特徴づけている。それゆえ、フラストレーションを解消させようと決心した彼は、最初に出会った女性に——あとで彼が認めたように——結婚を申し込んでしまった。これが無産階級出身の見苦しくはないが無知な娘、イーディス・アンダーウッドである。³³ ギッシングは彼女が従順な女となって彼の習慣に順応してくれるだろうと思ったのだが、これ以上の思い過ごしはなかった。やがて彼女は性悪で、無能で、凶暴な女、つまり彼が忌み嫌った労働者たちの性質をすべて兼ね備えたカメオ細工であることが判明したのである。

当初、イーディスとの関係は好ましい結果を彼にもたらした。彼女と出会って1週間後、彼の小説を書く筆が急に進み始め、『三文文士』というタイトルさえ決まった。書き始めてから数ヶ月間のあたふたとした無益な努力とは対照的に、この小説を彼は2週間ちょっとで仕上げたのである。このように猛スピードで書かれた本は、彼自身の経験に密着して創作されたもので、この上なく強固な個人的確信も幾らか表現されていて、一般に彼の一番すばらしい小説だと見なされている。小説家について書かれた本は、サッカーの『ペンデニス』やディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』など以前にもあつたが、³⁴ 『三文文士』は職業としての作家の問題を虚心坦懐に語った最初の小説であつた。この作品は文学市場の競争に生き残れない、そして中産階級の結婚で要求されることを満たせない小説家を描いており、金銭づくの現代社会がいかに文学と社会生活を墮落させているかを暴き出している。主人公のエドウィン・リアドンが自分は小説を書き続けることができないと思つても、彼の妻は出版者が受け入れてくれそうなものを創作するように忠告する。「今は商売の時代なのだから、芸術活動は商売として行なわなくてはならない」(第4章)と彼の妻は言う。しかし、リアドンはそうした時代に適応することができず、自分は小説家であるという主張をやめざるを得ない。それで、事務員の勤め口を見つけて粗末な下宿に引っ越すのだが、妻は彼と一緒に貧困生活を送ることを拒む。³⁵ 皮肉な結末として彼女は、リアドンが死んだのち、彼をいつも賞賛していたのに文学活動を商売として出世した進取的なジャーナリストと結婚する。リアドンの欲求不満、貧困への恐怖、無力感は特に詳しく提示されているが、その多くがギッシング自身の体験から来ていることは間違いない。詳細な事柄をリアリストティックに把握してい

るからこそ、彼はロンドンで働く作家たちの全体像を概略することができたのであり、その中心を大英博物館の読書室に据え、実に様々なタイプの作家を描くことができたのである。³⁶ こうした人物たちの信憑性は広く認められている。ある書評家は「私自身、彼らのような人間をすべて知っている。ギッシング氏の描く人物の迫真性には身震いがするほどだ」と言っている。³⁷

しかしながら、『三文文士』は文学の商業化を単に嘆いたものではない。それは文学趣味の大衆化と大量出版によって文学を商品化する産業界の慣例とを非難し、似たような影響力が愛、結婚、家庭生活において人間関係をいかに歪めているかを明らかにしている。登場人物たちは文学の保全を計ろうとする時だけでなく、道徳的あるいは精神的な葛藤を覚える時もまた敗北を喫する。ロンドンの文学界は、芸術、愛、そして理想主義全般にとって好ましくない運命が、そうした人物たちを破滅に導くための舞台にすぎない。当時の書評家たちの中には、『三文文士』で描写される悪が誇張されていると不平を鳴らし、読者を圧倒するような悲観主義を嘆く者が多かった。しかし、その巧みなりアリズム、そしてギッシングが登場人物たちの人生に立ち入る際に示す同情心には着目した。ギッシングの死後、この小説は彼の傑作として認められるようになり、何度も版を重ねている。そして、批評家の意見では彼の作品で抜きん出た存在となっている。「ギッシングの書物の中で『三文文士』だけが古典として、また変わらぬ価値と権威を持つ作品として生き残っている」とアーヴィング・ハウは評した。³⁸ 現代の批評家たちからは、大衆文化の有害な影響を見抜く透徹した洞察の点だけでなく、ギッシングが個人的な憤りを印象に残るような、まことしやかな人生観に書き換えた点においても、高い評価を得ている。

ギッシングはイーディスと 1891 年 2 月に結婚し、ロンドンの喧騒を逃れて静かな田舎町エクセターで新生活を始めた。彼が結婚後 6 ヶ月たらずで書き上げた『流謫の地に生まれて』(1892) は、このエクセターを舞台として利用し、どの作品よりも深いレベルで 19 世紀の道徳問題を扱った小説である。主人公はゴドウィン・ピークという名前の卑しい生まれの少年で、彼がカレッジを自主退学するエピソードは、ギッシングがオーエンズ・カレッジで受けた放校処分を偽装したものである。科学に関心のある自由思想家であった主人公は、良家の娘シドウエル・ウォリコムに恋するあまり、不可知論者であるにもかかわらず、それを隠蔽すべく神学生のふりをする。彼は不実な自分を正当化するために、主義主張を持たない人間は自由に好きなことをしてもいいのだと自分に言い聞かせる。このようにギッシングは信頼性のない

実存主義的な世界観への扉を開く。しかし、そこでは自分自身の道徳観を構築することができるとは言え、その責任もまた負わなければならない。ピークは自分のごまかしが暴露された時、その罪ゆえに自分が属したかった階級から「追放された人間」となったことを、生まれの卑しさゆえに悟った時と同様にはっきりと悟り、自分の道徳心の欠如を祖先が無産階級だったせいにする。『流謫の地に生まれて』は精神的葛藤に関するギッシングの最も深みのある研究であり、その幾らかを彼は自分が高く評価したドストエフスキー、トルストイ、ツルゲーネフ、その他の大陸の作家たちに負っている。³⁹

1891年、新しい出版社ロレンス・アンド・ブリンからの要請を受け、⁴⁰ ギッシングはヴィクトリア朝の小説を支配していた三巻本形式の伝統を破り、生まれて初めて一卷本形式の小説を書いた。当然ながら、彼は新しい形式によって以前よりも統一のとれた、焦点の定まったプロットを用いて、登場人物の数を減らすことができただけでなく、流行しつつあった客観性や劇的性格の高い手法をとることができた。非合法の組合に足を突っ込み、秘密がばれた時に深刻な結果を招いて苦しむ政治家を描いた『デンジル・クウォリア』(1892)は、抑圧的な因襲の力だけでなく、それに背くことの危険性についても警告した書である。クウォリアはリリアンを自分の妻として人に紹介しているにもかかわらず、この女性と結婚することができない。彼女が以前ある男と結婚していたからであるが、その男が式後すぐに逮捕されたために、彼女は以後ずっと彼に会っていない。そして、行方不明の夫アーサー・ノースウェイが雇われ、クウォリアの選挙での勝利を阻むために町に姿を現わし、リリアンは自分の妻だと主張する。結局、この秘密は公にされることなく、クウォリアは国会での議席を勝ち取る。しかし、秘密がばれるという恐怖のために、リリアンは入水自殺に駆り立てられ、彼もまた結婚のように確立された慣習に対して、その強い効力を認めざるを得なくなる。

『デンジル・クウォリア』の主人公は特に女性の権利に関して好意的な見解を持っている。女性の権利というテーマは、ギッシングの多くの初期作品群において大して重要な位置を占めていなかったが、彼の次の作品『余計者の女たち』(1893)では主題となる。社会における苦しみや不公平の多くは、女性に対する社会の劣等視が原因だと彼はいつも感じていた。『余計者の女たち』で彼は——いつものように悲観的にはあるが——自分たちの困難に様々な方法で対処しようとする女性を扱っている。小説の中心には、女性に労働の訓練を施し、穏やかな形で女性解放の準備をさせるために設立された協会がある。ヒロインのローダ・ナンは、この組織への忠誠心と彼女が結婚したいと

思っている恋人との板ばさみで苦しむ。この主たるプロットの伴奏として数多くの脇筋がある。例えば、アリスとヴァージニアという中年のマドン姉妹は、仕事がないためにかろうじて生き残ることができるレベルの生活を余儀なくされる。更に、下の美しい妹モニカは店での骨折り仕事から逃れるために結婚し、その報いを受けることになる。この小説が女の人生に下す審判は社会問題の範囲を越えているが、女が社会的・経済的な自立を求める際に直面するジレンマを鋭く洞察したものであり、今では女性問題を最も客観的に、かつ透徹して論述したものとして知られている。

1893年、一人の息子の父となっていたギッシングは、家族を連れてロンドンへと戻った。⁴¹「また都会の街路を見たくなった」と彼はベルツ宛ての手紙に書いている。⁴²ほとんど1年間、彼が着手した新しい小説の筆は進まなかったが、それとは別の道が急に開けた。ある編集者から短篇小説を幾つか雑誌に書いてくれないかと頼まれたのである。⁴³短篇はもう何年も書いていなかった。彼は本格的な長さの小説を書こうとするたびに挫折していたが、短篇ならば何とかできるだろうと考えた。短篇小説は収入源として彼にとって歓迎すべきものだった。彼の長篇小説の売れ行きは相変わらず芳しくなかったが、短篇の方は結構な儲け口となったからである。この頃の一般大衆は、ギッシング自身が『三文文士』で述べたように、短い形式の読み物を要求し始めていたし、三巻本形式の小説は出版事情の変化によって消滅しつつあった。⁴⁴

難産の末、1894年4月に完成した『女王即位50年祭の年に』は、ギッシングにとって最後の三巻本形式の小説であった。中心人物は結婚によって自分の自由を危険にさらしてしまう若い女性で、彼女は同じように独立心の強い夫と別居する一方で、子供を産んで自活しなければならなくなる。この小説の主要な筋は、現代社会の諸悪を暴き出す場面で互いに緩やかな結び付きを見せるような、そういった非常に多くの脇筋と人物たちとの間に、埋没してしまった感がある。ギッシングは、ヴィクトリア女王の即位50年祭を祝う群衆の行動を示す時、その大衆文化が孕む危険性に特別の注意を促している。無教養さが表出した民主主義、卑俗な広告、無節操な日和見主義、粗野な態度など、すべてが白日のもとにさらされる。しかしながら、物語の中心は相変わらず夫婦の不和である。結婚生活は卑劣な罠として提示されるが、ヒロインが実践する別居生活もまた様々な危険を孕んでいる。

おそらく、1つには結婚した男として安定した収入を得る必要があると思ったから、1つには『三文文士』で示した文学市場についての見解を自分でも受け入れたので、この頃にはギッシングもまた「商売の時代」における行動様式

を少し学び、プロ意識を高めて自分の仕事に取りかかるようになっていた。彼は作家協会に入って著作権の代理人を雇い、⁴⁵特に短篇や中篇の小説を書くように依頼された仕事を喜んで引き受けた。積極的に出版界と関係を持つようになった結果、作家や編集者たちと友だちになったり、社交上の約束をしたりする機会が開けた。彼は晩餐会の招待を受けてオマル・ハイヤーム・クラブに入会し、⁴⁶週末を社交界の人々と過ごすようにさえなった。年輩いたメレディスとも再会し、H・G・ウェルズ、トマス・ハーディ、エドワード・クロッド、その他の文人たちと交わりを結んだ。⁴⁷当時、ギッシングと会った人々にとって、彼が以前は貧乏だったとか世捨て人だったとかは、とても信じがたいことであった。

1894年から97年にかけて、ギッシングはいつものテーマから離れて4つの中篇小説、すなわち『イヴの身代金』(1895)、『埋火』(1895)、『下宿人』(1895)、『都会のセールスマン』(1898)を書いた。すべて出版者たちや編集者たちに確約したことを果たすために執筆された小作品だが、そこでギッシングはコメディの意外な才能と皮肉な状況を手際よく展開させる才覚とを見せている。これらの小説は効果的に市場に出され、再版と翻訳において成功を収め続けた。1897年の『渦』において、再びギッシングは社会を真剣に観察した小説へと戻り、自分にとって未知の舞台や状況を扱ってみようとした。登場人物たちは有閑階級に所属する社交界の人々である。文学青年の主人公は、この階級に属して才能はあるが神経症の女性と結婚し、田舎へ連れて行って一緒に住もうとする。しかし、彼は騒然としたロンドンの社交界の中心から発せられる破壊的な影響から逃れることができず、金銭的な災難や自殺や嫉妬の影響からもまた脱し切れない。結局、結婚は失敗に終わり、彼の妻は死んでしまう。社交界で猛威をふるう目に見えない力に対して、このように戦い敗れた主人公は進んで隠遁生活に引きこもり、幼い息子との付き合いに満足を求める。この結末にはギッシング自身の上の息子に対する関心が反映されている。『渦』は力強い作品である。これまでの長篇小説よりドラマティックで、より直接的な語り口の短篇や中篇を書く時に彼が習得した技術が、ここでは見事に活用されている。1つには彼の長篇小説以外の作品が大衆の注目を浴びたために、1つにはこの作品自体の真価ゆえに、『渦』は以前のどの小説よりも売れ行きがよかった。遅ればせながら批評家たちもまた、彼が現代生活を率直かつ忠実に描出できる卓越したリアリズム作家であることを認めたのである。⁴⁸

そうこうするうちに、ギッシングの2度目の結婚は最初の場合と同様に不

幸なものになっていた。最後は精神病院で死ぬことになるイーデイスは、結婚して数年後に精神異常の兆候を示し始めていた。⁴⁹ 手紙や日記の中で、⁵⁰ ギッシングは彼女が子供たちを放ったらかしにし、召使たちと喧嘩を（追い出すこともしばしばであった）し、短気を起こして家庭を混乱させると言って不満を漏らしている。彼女はギッシングに対して事あるたびに悪態をついていたし、家庭は騒動で常に緊迫していたので、彼は上の息子を（彼の日記の表現を借りれば、「この愛のない全く不似合いの結婚によって生まれた子供」を）哀れに思い、⁵¹ ウェイクフィールドの実家に連れて行ってもらい、そこで一緒に住ませた。二人が元の鞘に収まる時もあるにはあったが、1897年9月に彼が再びイタリアへ旅立った時、それが二人にとって永遠の別れとなった。この旅行の結果として、彼は初めてノンフィクションの作品を手がけることになる。1つは『チャールズ・ディケンズ論』（1898）で、この作品を彼はシエナに滞在している時に完成した。⁵² もう1つは、この時期に集めた資料を使って、数年後に書いた旅行記『イオニア海のほとり』（1901）である。ディケンズに関する本は主題としての作家を真剣に論じた本格的な研究書で、半永久的にディケンズ批評に影響を及ぼし続けるだろう。この本は、中流階級の人物に関するディケンズの描写に潜む（攻撃と擁護という）分裂した動機を鋭い知覚で分析し、ディケンズのユーモア、性格創造、女性の扱いを正しく評価している。以後、ギッシングはディケンズの専門家として有名になり、この作家の選集のために多くの小説に序文を書くようになった。⁵³ しかし、実際には序文は6冊目までしか世に出ず、残りは1924年まで出版されなかった。

『チャールズ・ディケンズ論』が完成すると、ギッシングはカラブリア、すなわちギリシャとローマの文明が交わった古代世界のマグナ・グラエキアにしばらく逗留するために、南イタリア方面へ旅行した。⁵⁴ 彼は古典で描かれた人物や出来事との連想によって生まれる自分の感想を表現すべく、ほとんどの旅人が訪れたこともない遺跡へ行った。カラブリアの旅行を終えると、彼は執筆予定の古代ローマに関する本のために、ローマで1ヶ月ほど過ごした。そこで調査をしている間に、彼はH・G・ウェルズ夫妻やアーサー・コナン・ドイルなど、⁵⁵ 多くのイギリスの友だちと再会することになる。そして、イギリスに戻る途中、彼はベルリンまで回り道をし、旧友エドゥアルト・ベルツと数日を過ごした。

1898年4月の中旬にイギリスへ戻ったギッシングは、ドーキングの町に家を借りて執筆を再開した。⁵⁶ 今回は一人暮らしで、イーデイスと下の息子はロンドンを離れず、上の息子はギッシングの母と妹たちの住むウェイクフィー

ルドにやられて同居したままであった。彼はディケンズの序文、短篇小説、むなしく失敗に終わることになる劇執筆の試みで多忙を極めていたが、⁵⁷ 近くに住む H・G・ウェルズとは時おり会っていた。その年の6月23日、ガブリエル・フルリというフランス女性から、⁵⁸ 『三文文士』翻訳の許可を求める手紙がギッシングのもとへ届いた。翌月26日に彼女は彼を訪問し、秋には1週間ほど彼の家に滞在した。ギッシングは洗練された知性のある女性、彼の理想主義的な愛の概念を支持できるような、そうした女性に生まれて初めて恋をした。離婚も正式の結婚も確約できなかったが、1899年の春にはパリへ引っ越して、彼は彼女と一緒に住むようになる。ギッシングもガブリエルも保守的な人間だったので、自分たちの結婚は因襲に背く大胆な行為だと思っていた。しかし、彼女の母親は二人の結婚を完全に認めてくれ、そして一緒に住んでくれた。⁵⁹ パリで新生活を始めたギッシングは、数年間ではあったが比較的幸せな時を過ごすことができた。イギリスを離れる前に彼は『命の冠』(1899)を脱稿していたが、これは8年間もの躊躇と誤解を経たあと、やっと結婚を同意する中年カップルの話である。それは理想主義的な愛についてのギッシングの考えを幾らか表明した小説、国際政治とイギリス帝国主義に対する彼の新たな関心を反映した小説であった。

ギッシングが純愛を捧げ、階級的にも知的にも自分と同等の女性と最後の生活を送っていた時、その関係は厄介なものであった。食事や家庭内の問題などでの言い争いに加え、ギッシングはパリのアパート生活が嫌いで、健康状態も悪かった。更に、イギリスに残してきた家族を扶養するための金がなくて困っていた。それで、彼はカラブリア旅行の合間に付けていた日記を利用して『イオニア海のほとり』(1901)を書いたが、これは彼の趣味と個性を最も直接的に表現した作品となった。このあとに続いて書かれた『我らが風呂敷の友』(1901)という小説は、進化論を社会問題に当てはめることを攻撃した喜劇的な意味合いを持つ小作品である。それから、また別のノンフィクション作品『ヘンリー・ライクロフトの私記』(1903)が出版されたが、これは自然、書物、孤独、貧困、ピューリタニズムといった問題についての短い瞑想録集である。自分とよく似た虚構の人物を通して書くことで、ギッシングは宗教、民主主義、余暇、学問について自分が晩年にまとめていた意見を述べることができた。これらの意見は時として彼の小説の傾向と一致し、その瞑想録の大半は彼の小説に見られるエピソードの土台となるような、そういった個人的な思考や経験をはっきりと示している。しかし、ライクロフトの私記を構成する最も魅力的な要素は、作品を通して雄弁に語りかけてくる

個人の本質的性格である。つまり、自分の弱点を意識し、実績がほとんどないことを認めながらも、書物、自然観察、過去についての内省からなる平穩な人生の中に、平和を見出すことができる優しい老人の個性である。『ヘンリー・ライクロフトの私記』はギッシングの一番の人気作品となった。一般人にとってギッシングと言えば、この作品が常に思い出され、その人気は皮肉なことに小説家としての彼の名声をかげらせる結果となった。

ギッシングは肺気腫と診断された病気のために何年間か苦しんでいたが、⁶⁰そうした半病人の状態では長期間の療養のために仕事を中断せざるを得なかった。1901年、彼はサフォーク州のイースト・アングリアン療養所で1ヶ月を過ごし、⁶¹1902年には健康を考えて温暖な気候の地、南フランスのサン・ジャン・ド・リューズ界隈に転地しなければならなくなった。⁶²それから、彼はかつて関心があった幾つかの問題に立ち帰りながら、全く違った点に重きを置いた『ウィル・ウォーバートン』(1905)を書き上げた。これは彼が生存中に完成させた最後の小説である。この作品では中流階級のビジネスマンが金を失って雑貨商になることを余儀なくされる。しかし、この商売のおかげで彼はビジネス社会の殺人的な競争から逃れ、予期せぬ幸せを見出すことになる。ギッシングは有閑の特権階級に対する昔の愛着が幻想であったことを、そして質素な生活形態に愛情と友情の堅い地盤が見出せることを認識したように思われる。

何年もの間、ギッシングはいつもと全く異なる問題についての本、すなわち6世紀のローマについての歴史小説を書こうと計画していた。このために彼は詳細にわたるメモをとっていたし、最後のイタリア旅行では作品中の幾つかの事件が実際に起こる場所としてモンテ・カッシーノ修道院を訪れていた。⁶³『ヴェラニルダ』(1904)はゆっくりと展開する冒険と陰謀の物語で、登場人物や彼らの思考に力点が置かれている。古代ローマの都市や田舎の場面についてのギッシングの所見には、当時の熱心な学生しか感謝しないような、そうした詳細な説明が幾つも含まれている。しかし、彼が作品を完成させずに死んだので、死後出版された際には最後の5章が不足していた。

1903年12月28日、ギッシングはガブリエルと一緒に住んでいたサン・ジャン・ド・リューズ近くの町、サン・ジャン・ピエ・ド・ポールのイスプールで、肺病の末に息を引き取った。⁶⁴彼は1週間ほど持ちこたえていたが、その間にイギリスにいるH・G・ウェルズとモーリー・ロバーツが彼の病床に呼ばれた。ロバーツが到着したのはギッシングが死んだ翌朝だったが、ウェルズは彼の死に目にどうにか間に合うことができ、その場面を『自伝

の試み』(1934)の中に記している。⁶⁵ ギッシングの死については論争が繰り広げられた。ウェルズはガブリエルが病人の世話をちゃんとしていないと思い、二人の看護婦(一人はフランス人の修道女、もう一人はイギリス人女性)を連れて来た。彼は病人のために処方された軽い食事では不十分だと考え、もっと食べ物を与えなければならないと思ったのだが、そうした処置が結果的にギッシングの死に直結したのだとガブリエルは主張していた。ギッシングの話し相手になるように頼まれたイギリス人の司祭は、彼が死ぬ前にキリスト教を信奉するようになったという報告を発表した。⁶⁶ これは死に行く男のうわごとを誤解したもので、ロバーツはガブリエルとイギリス人看護婦から集めた情報をもとに、激しく否定する声明を出した。⁶⁷ ギッシングはサン・ジャン・ド・リューズにあるイギリス人の共同墓地に埋葬されている。⁶⁸

ギッシングの死後に彼の2つの小説が上梓された。1つは未完の『ヴェラニルダ』で、フレデリック・ハリソンの序文と共に出版された。もう1つは完成した最後の小説『ウィル・ウォーバートン』である。彼の数多くの短篇小説は3つの選集、すなわち『蜘蛛の巣の家』(1906)、『境遇の犠牲者』(1927)、『小話小品集』(1938)にまとめられた。そして、ロチェスター版ディケンズ全集のために書かれた序文が集められ、『チャールズ・ディケンズの作品研究』(1924)と『不滅のディケンズ』(1924)として世に出た。ギッシングがアメリカ滞在中にシカゴの新聞に掲載してもらった短篇小説は彼の作品だと鑑定され、『父の罪』(1924)と『ブラウニー』(1931)として再び印刷された。そして、2つの物語(1つは未発表の、1つは再版の物語)が、『我が初りハーサル』と『我が恋敵の聖職者』(1970)に収められた。物語、随筆、覚書、手紙を含めた未発表の資料は、1962年に『ジョージ・ギッシングの備忘録』、1970年に『ジョージ・ギッシング—随筆と小説』、1978年に『ジョージ・ギッシングの小説論』の形で出版されたが、最後の作品には以前発表された2つの随筆が再録されている。⁶⁹ 1978年には長年ギッシングが付けていた(書き付けや紀行文を収録した)日記が、『ロンドンと後期ヴィクトリア朝のイギリスにおける文学生活—小説家ジョージ・ギッシングの日記』として刊行された。

ギッシングの初期作品群は、詳細な描写、個人的見解の陳述、不自然な(時には煽情的な)プロットを持つ点で、19世紀中葉のイギリス小説における一般的な慣例に従っている。作家としての彼の進化は、読者層の広がりや三巻本形式の衰退に伴う趣味の変化に対応したもので、それに従って彼の後期作品群はより簡潔に、より客観的に表現され、より単純な作品構成となっている。彼の小説はヴィクトリア朝の作品を支配していたリアリズムの精神に忠

実であるものの、彼自身が教義的にリアリズム作家であったことは一度もない。彼は小説を自分自身の意見の表現媒体と考えていたので、そこには必然的に多くの自叙伝的要素が見られる。自分の作品に個人的な先入観が存在することを否定するどころか、世紀末頃に支配的だったリアリズムの概念とは正反対に、小説は作家の態度を表明したものであるべきだとしばしば主張していた。「小説家が客観的であったことはなかったし、今後もないだろう。作品は作家自身が見た生活の断片である。作家自身の目で世界を見ることによって、またとない喜びを読者に感じさせることが作家の仕事なのだ」とギッシングは述べたことがある。⁷⁰ 小説は一般大衆を喜ばせるために書くべきだという考えを彼は拒絶したが、小説は主観を交えない現実の描写であるべきだという考えもまた同様に拒絶した。小説家に必要なのは、正確さが求められる報道記者のような能力ではなく、「嘘を言わない精神」であると思っていたギッシングは、「現代生活を活写する際の芸術家の誠実さ」としてリアリズムを定義し直したのである。⁷¹

ギッシングにとって芸術的に誠実であることは、人生を絶望的ではないにせよ、概して悲観的に見ることを意味する。彼が描く世界には、貧者、女性、芸術家に対する社会の不公平さによって、常に暗い影が射している。その世界は競争、科学、宗教、商業主義、利己主義によって生まれる悪で疲弊している。社会的な不公平を除去するために提示される救済策は、どれもギッシングにとって現実味があるとは思えなかった。ほとんどの人が進歩の兆候として歓迎した産業化と民主化は、彼が尊重した繊細なヒューマニズムにとって脅威であった。彼自身の理想は彼が嘆いた社会の悪弊の解決策とはならなかった。しかしながら、現存する社会は彼が人間の最高の可能性と考えたものを育むことができない。そのことを持続的に考察してきたからこそ、ギッシングはイギリスの中でも社会生活を最も鋭く、最も誠実に観察した小説家の一人だと言えるのである。

ギッシングと同世代の人々は、⁷² 彼の悲観主義と労働者階級の人物に対する無情な扱い方とに対してしばしば不平を鳴らしたが、結局は彼の卓越したテクニックと彼の描く現代生活の場面が本物であることを認めた。『ヘンリー・ライクロフトの私記』は誤って彼の自叙伝と見なされていたが、素晴らしい文体と平穏な精神ゆえに非常な称賛を博し、彼の最も有名な作品となった。比較的最近の批評家たちは、⁷³ ヴィクトリア朝社会の生活に対するギッシングの洞察力に富む描写を強調し、リアリティな小説を媒体にして強固な個人的確信の表明に努めるというパラドックスを検証している。1912年1月11

日の『タイムズ文芸サプリメント』に掲載された記事で、⁷⁴ ヴァージニア・ウルフは「ギッシングがいわゆる英国流の小説執筆法を実践したのはもっともなことである。ある感情の高い峰から次の峰へ飛び移るのではなく、この上なく慎重に彼は隣接する低い尾根の部分ですべて埋め尽くす作業をした。それは時には退屈きまりない作業である。彼の芸術的なトーンの全体的効果は非常に低いので、その芸術の成果を十分に味わうためには、最初から最後のページまで読まなくてはならない。しかし、根気よく読んで行けば、効果が薄くて意味がほとんどない章も次第に重要性和勢いを増し、読者の想像力の上に蓄積されることによって、もはや逃れられないように思える世界を作り上げていることが分かるだろう。(中略) 彼が創造した世界は、まるで土と石でできているかのように——いや、比べものにならない位に——リアルで、堅固で、説得力に富んでいるが、実際には小さな世界なのである」と書いた。⁷⁵ 一方、『ヴィクトリア朝小説における労働者階級』(1971)の著者P・J・キーティングは、「小説に労働者階級の人間を登場させる際に、その芸術的問題と真剣に取り組もうとした姿勢を、一連の小説によって跡づけることができるヴィクトリア朝で最初の小説家はギッシングである」と言っている。彼は更に付け加えて、ギッシングの小説は「年代順に研究してみると、(中略) 固定化した文学の伝統との関係を一貫して真剣に断とうとしたこと、つまり労働者階級について書く時に、いかにして個人的な社会観と芸術的な客観性とのバランスをとるべきかという、そうした問題に必死に取り組んだことを証明している」と述べている。⁷⁶

意見の違いは幾らかあるものの、ギッシングの批評家たちは彼に小説家として高い格づけを与えている。1943年にジョージ・オーウェルは、「『三文文士』、『民衆』、『余計者の女たち』を例として挙げただけで私は喜んで言わせてもらうが、彼ほどの小説家がイギリスで輩出されたことはほとんどない」と書いている。⁷⁷ 『イギリスの小説』(1954)の著者ウォルター・アレンは、「ギッシングは大作家でないが、群小作家よりはかなり優れた作家だ。彼は、その作品の読者に作者本人を必然的に意識させるような、そうした未熟な芸術家の一人である。彼の小説は、おそらく3つの作品の場合を除いて、その創作者から十分な距離が置かれているとは言えない。余りにも個人的すぎるし、恨みを激しく表現したものだと思わざるを得ない。ギッシングは恨みをあからさまに示した最初の小説家であったが、そのような恨みの表現は今日では普通のことである。しかし、この恨みは客観性が欠けるものの、ある意味で彼の作品に普遍性を与えている」と言っている。⁷⁸ そして、『ギッシング——書物

の生活』(1982)の中でジョン・ハルペリンは、ギッシングは稀に見るほど数多くの素晴らしい小説と、最もよく知られたヴィクトリア朝の幾つかの小説は別にして、何よりも素晴らしい『三文文士』という小説を書いたと主張してから、「ギッシングは一流の小説家である。彼が感受性と知性を使って扱うテーマはどれも重要で、物事に対する彼の理解力は鋭くて精密だ。彼が描く人物とその問題は実にリアルであり、彼の時代だけでなく我々の時代でも社会的な意味がある」と断じている。⁷⁹

(出典) Jacob Korg, "George Gissing," *Dictionary of Literary Biography*, ed. Ira B. Nadel and William E. Fredeman (Detroit: Gale Research, 1983) 18: 103-19.

訳 註

- 1 ウェイクフィールド (Wakefield) はイングランド北部の都市リーズの南 16 キロにある大聖堂の町。現在の人口は約 7.5 万で、バラ戦争の古戦場として有名。父 (Thomas Waller Gissing, 1829-70) は植物学の知識があり、地方の植物を調査して出版した書物も何冊ある。彼は多くの蔵書——ギッシングが読破した最初の本は当時の流行作家ディケンズの『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1840-41)——を持っていて、教養を志向する点において息子に大きな影響を及ぼした。一方、教養がなかった母 (*née* Margaret Bedford, 1832-1913) は信心深いだけで息子を愛撫することもなかった。この愛情に欠ける母をギッシングは嫌って避けていたので、彼女に関する資料はほとんど残っていない。生家については本書の第 15 章第 2 節「ギッシング・トラストとギッシング・センター」を参照。
- 2 ギッシングが生まれたのは 1857 年 11 月 22 日 (日曜日)。弟たちは 20 歳で死んだ 1859 年生まれの William と、弁護士としても小説家としても成功しなかった 1860 年生まれの Algernon。妹たちはギッシングより 6 歳年下の Margaret と 10 歳年下の Ellen。ギッシングは弟たちと頻繁に文通していた以外、肉親とも親戚とも疎遠であった。
- 3 この学校はウェストゲイト通りの北側に平行して走る Back Lane にあったが、今は残っていない。
- 4 父の死 (1870 年 12 月 28 日) の原因は肺充血であった。これは 33 年後にギッシングが死んだ時 (奇しくも同じ 12 月 28 日) と同じ原因である。母とは共通点がなく、幼すぎた弟妹たちは知的な話し相手になれなかったので、父の死後はギッシングの生活に孤独と不幸の影が射すようになった。
- 5 ギッシングが二人の弟と一緒に入学した学校 (Lindow Grove School) はクエーカー教徒の寄宿学校で、マンチェスターから南へ約 20 キロ、ギヤスケルが幼

第1章 ギッシングの生涯

少時を過ごした Knutsford から東に約9キロの町 (Alderley Edge) にあり、教育水準も高かった。現在この学校はアーサー王伝説の魔法使いの預言者との関係で「ザ・マーリン」(The Merlin, 5-9 Wilmslow Road) という名前を持つホテル兼レストランになっている。学校時代のギッシングは勉学を続けるための奨学金取得に向けて睡眠を5時間半に定め、食事の時も散歩の時も本を読んでいた。1872年5月にオックスフォード大学の地方試験に合格したことで、オーエンズ・カレッジにおける3年間の授業料免除を受け、翌年1月には大学入学資格試験にも合格した。

- 6 このカレッジはマンチェスターの綿布商人 (John Owens, 1790-1846) による約10万ポンドの寄付で1852年に設立された無宗派学校。中等教育と大学教育の橋渡しをする機関で、現在のマンチェスター大学の前身。最初の2年間、ギッシングはオールグリー・エッジに寄宿したまま通学し、3年目にマンチェスターで一人暮らしを始めた。
- 7 一人暮らしと勉学中心の生活による孤独が街の女 (Marianne Helen Harrison, 1858-88) に恋するようになった原因である。1876年2月に淋病を患ったにもかかわらず、ギッシングはネルを社会の犠牲者と考え、お針子として更正させるためにミシンを買い与えたり、父の形見であった時計を売ったりした。しかしながら、彼女は飲酒癖があつて金のために売春をやめることができなかった。
- 8 1876年5月31日、ギッシングは張り込み中の刑事に逮捕され、6月6日に有罪の判決を受け、1874年から翌年にかけて必死に準備して合格していたロンドン大学入学の許可も取り消されてしまった。
- 9 釈放後、ギッシングは故郷のウェイクフィールドに帰ったが、黒羊は新天地アメリカへとという当時の慣習に従い、オーエンズ・カレッジでカンパされた金によって、リヴァプール港からボストンへ出立した。
- 10 ボストンの新聞 (*Commonwealth*) の1876年10月28日版に、“‘Elaine’—Rosenthal and Tojetti” という絵画に関するギッシングの批評文が掲載された (*Letters* 1: 53)。
- 11 ウォルサム (Waltham) はボストンの西郊外にある人口6万弱の市で、Brandeis University (1948年創立) の所在地。ギッシングが臨時雇いの教師をした Waltham High School (1869年創立) は、幹線の Boston Post Road から南に走る School Street にあつたが、1933年に取り壊された。
- 12 3月1日、ギッシングは何も言わずに学校をやめたが、その理由についてクステイヤス氏は、ネルから帰国を願う手紙をもらっていたギッシングが、1歳年下の女学生 (Martha Barnes, 1858-1946) と深い仲になることに対して良心の呵責を感じたからだと述べている。ギッシングがのちにマーサに宛てた手紙については *Letters* 6: 377-78 を参照。
- 13 ギッシングが2日で書き上げて18ドルを得た最初の小説は、1877年3月10日版の『シカゴ・トリビューン』(*Chicago Tribune*) に載った短篇「父の罪」(“The Sins of the Fathers”)。冒頭部分には貧困に関するギッシング特有の描写

が既に見られる。

- 14 無断掲載された作品は「父の罪」。トロイ (Troy) はニューヨーク州東部オールバニー (Albany) の北東にあるハドソン川東岸の市 (人口 5.4 万)。『三文文士』のウェルプデイルの話 (第 28 章) によれば、トロイで金に窮したギッシングは数日間をピーナッツだけで食いつないだようである。
- 15 ボストンから船に乗ったギッシングがリヴァプール港に着いたのは 10 月 3 日。6 週間ほどウェイクフィールドに里帰りしたが、作家として身を立てるために直ちにロンドンへ上京した。
- 16 上京したギッシングは最初 Gray's Inn Road 近くに家具付きの部屋を借りた。1877 年の終わりには Tottenham Court Road はずれの下宿に移っているが、これはロンドンにきたネルと一緒に住むためであった。このあと、ギッシングは何度も引っ越したが、それは行く先々で繰り返されるネルの売春と喧嘩のせいであった。1878 年 9 月、大英博物館の西 (Gower Place) に住んでいた彼は、11 月 22 日の誕生日に 21 歳の成年に達すると、父の信託財産を受け取る資格ができ、翌 1879 年 4 月に 300 ポンドを得た。彼がリージェント・パークの東にある Hampstead Road のセント・ジェームズ教会でネルと正式に結婚したのは同年 10 月 27 日 (月曜日) で、『暁の労働者たち』が完成した数日後のことであった。ギッシングの弟たちはロンドン訪問時にネルと会えたが、妹たちや親友ロバーツは会わせてもらえなかった。母への手紙にもネルへの言及は一切ない。
- 17 ハリソン (Frederick Harrison, 1831-1923) はイギリスの法律家、哲学者、英国実証哲学協会会長 (1880-1905)。実証哲学の主唱者として 1893 年に *Positivist Review* を創刊して社会改良を呼びかけた。著書に *The Meaning of History* (1862), *Order and Progress* (1874), *The Positivism* (1901), *John Ruskin* (1902) などがある。当時 49 歳だったハリソンは社会批評家としても主要な雑誌にたびたび寄稿していた。文学や雑誌の方面に顔が広く、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-88) をはじめとする多くの知人に『暁の労働者たち』を読むように勧めていた。ギッシングが彼と知己を得たのは 1880 年 3 月だが、4 月 16 日には肉親のウィリアム (享年 20 歳) を結核で亡くしている。当時はネルも咯血を繰り返しており、ギッシングは運命論的な考えに傾いていた。
- 18 コント (Auguste Comte, 1798-1857) は実証主義哲学の提唱者であり社会学の祖。サンシモン (Saint-Simon, 1760-1825) の弟子で、フランス革命後の社会の理論づけとして独自の思想体系である実証哲学を築いた。神学的、形而上学的、実証科学的な三段階的社会進化の理論や、社会静学と社会動学よりなる社会学を考えた。
- 19 モーリー (John Morley, 1838-1923) は英国の自由党政政治家、伝記作家。政治方面ではアイルランド総督、インド総督、枢密院議長などの重責に着き、文学方面では *Fortnightly Review* と *Pall Mall Gazette* の急進的な編集者として名声を博した。
- 20 ベルトツ (Eduard Bertz, 1853-1931) はポツダムに生まれ、ライプツィヒと

チューリングの大学で哲学と政治学を学び、活動的な社会主義者となった。鉄血宰相ビスマルク (Otto Bismarck, 1815-98) のドイツを逃れてパリとロンドンへ亡命し、知的な話し相手を求めるために出した 1879 年 1 月 17 日の新聞広告を通してギッシングと知り合った。その後、アメリカへ渡って農場を営み、図書館司書になる。そして、ロンドンに戻って図書館員をしたのち、英語で書いた物語によって成功し、ポツダムに帰郷して定住する。代表的な小説は『幸福とグラス』(*Glück und Glas*, 1891) と『サビーナの荘園』(*Das Sabinergut*, 1891)。ギッシングが最後の 16 年間に月 1 回の割合でベルツに書き送った手紙は、彼の活動と思想を記録した貴重な資料である。

- 21 ロバーツ (Morley Roberts, 1857-1942) は頻繁に旅行して経験を積み、*Rachel Marr* (1903) をはじめとする多くの小説と、旅行記や生理学関係の本を書いた。彼のギッシング伝は人物名が変更されているが、それは当該人物からの訴訟を避けるためであった。手紙の引用における字句の変更などの問題点はあるが、ギッシングに関する多くの証拠を提供する重要な資料となっている。

- 22 *The Private Life of Henry Maitland*. London: Nash, 1912.

- 23 1881 年 7 月、ギッシングはイースト・サセックス州南東岸の市 Hastings でネルのために部屋を借り、自分は 8 月に Gower Place の下宿へ移ったが、彼女は 1 ヶ月もしないうちに逃げ帰ってきた。その後、彼はロンドン南西部テムズ川南岸の Battersea にあった病人用の寄宿舎にネルを入れた。1 週間 15 シリングの費用は彼の僅かな収入にとって大きな痛手であったが、彼はどうしても彼女と離れる必要があったのである。

- 24 メレディス (George Meredith, 1828-1909) は『現代の恋』(*Modern Love, and Poems of the English Roadside*, 1862) を出版した頃、チャップマン・アンド・ホール社の出版顧問となり、その職を 1894 年まで務めた。難解な表現に満ちた彼の作品は広い読者層をつかめず、新聞雑誌への定期的な寄稿と出版社へ持ち込まれる原稿の審査が主な収入源であった。

- 25 1895 年 2 月 10 日付けの手紙 (*Letters* 5: 296) を参照。

- 26 チェルシーに住んでいたギッシングは、第アルジェノンに宛てた 1884 年 4 月 28 日付けの手紙の中で、「昔の北西地区に、本当に自由奔放な生活ができるような、どこか St. John's Wood あたりに戻りたい」(*Letters* 2: 211) と述べ、実際にリージェント・パーク近く (62 Milton Street) へ引っ越し、同年 12 月には公園南側の Clarence Gate 近く (7K Cornwall Residences) に移り、ここが彼のロンドンでの最も長い住まいとなった。

- 27 アルジェノンに宛てた 1885 年 10 月 31 日付けの手紙 (*Letters* 2: 360) を参照。

- 28 1888 年 2 月の後半、ギッシングはイギリス海峡に臨む行楽地 (27 Brightland Road, Eastbourne) で気分転換をしていたが、その月の 29 日 (水曜日) の夕方に妻の死を伝える電報をもらい、翌 3 月 1 日にロンドンでロバーツと合流し、彼女の下宿 (16 Lucretia Street, Lower Marsh, Lambeth) へ向かった。

- 29 宿泊費節約のためにギッシングの伴をしたのはプリット (Ernst Konrad Plitt, 1854-1928) という名前のドイツ人。この男は感受性や思いやりがなく、芸術や教養に関心のない、下層階級に特徴的な欠点を持っていた。スミス・エルダー社から受け取った『ネザー・ワールド』の著作権料 150 ポンドを旅費にあて、ギッシングはプリットと一緒に汽車でマルセイユまで行き、そこから船に乗って 1888 年 10 月 30 日にナポリに着いた。その後は一人旅となり、11 月 30 日にローマ、12 月 29 日にフィレンツェ、翌年 2 月 8 日にヴェニスへ行った。そして 26 日にヴェニスを発ち、スイスとベルギー経由で 3 月 1 日にロンドンに帰り着いた。
- 30 “The Headmistress.” 結局この物語は完成しなかった。
- 31 例えば 1890 年 7 月 15 日には、「午前中に 1 ページ書いたが破棄せざるを得ず。午後は 6 ページ戻って、2 ページ書き直し。非常に悲惨な気分。話を明確にするための苦労で発狂せんばかり」(*Diary* 221) と記している。
- 32 1890 年 9 月 6 日付けのベルツへの手紙 (*Letters* 4: 235) や 1891 年に出版された『三文文士』の第 7 章を参照。1890 年のギッシングの年収は 150 ポンドにすぎなかった。
- 33 1890 年 9 月 24 日、孤独に耐えられなくなったギッシングは、Marylebone Road に飛び出して最初に会った女性 (Edith Underwood, 1867-1917) に声をかけたと言っているが、その日のギッシングの日記によれば、彼は Oxford Street のミュージック・ホールでイーディスに会ったようである。翌 1891 年 2 月 25 日、ギッシングは彼女と St Pancras の戸籍登録事務所で結婚したが、その場にギッシング家の者は誰も同席していなかった。彼は妻と二人で、『三文文士』の著作権に対してスミス・エルダー社から得た 150 ポンドをもとに借りた Exeter (イングランド南西部デヴォン州の州都) の住まいに、パディントン駅から汽車に乗って直行した。その年の 12 月 10 日に長男 (Walter Leonard, 1891-1916) が、1896 年 1 月 20 日に次男 (Alfred Charles, 1896-1975) が生まれる。
- 34 『ペンデニス』(*Pendennis*, 1849-50) は、母の盲目的な愛を受けて育った名家の一人息子アーサー・ペンデニスが、父の死によって学校を中退し、恋愛や放蕩を繰り返しながら、最後は文筆家となって許婚と結ばれるまでの半生を描いた自伝的色彩に富む作品。作者自身の若い頃のボヘミアンぶりを髣髴させる主人公の恋愛と精神的遍歴を中心に、自己と現世とに満足するヴィクトリア朝に特有な青年の姿を描いている。『デイヴィッド・コパーフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50) は、主人公デイヴィッドが父の死後に生を受けた瞬間から、悲惨な再婚をした母の死によって孤児となり、幾多もの辛い経験をしながら法律の仕事で身を立て、やがて小説家として成功するまで、その人間的成長の足跡が一人称の追憶記形式で鮮やかに描かれた自叙伝的小説。幼年期の無垢から青年期における実社会での経験を通して自己を発見するまでの過程を描いている点で、『ペンデニス』と同様に教養小説の流れを汲んでいる。

- 35 1878年の終わり頃、ギッシングは短期間ではあるが慈善病院の事務員として働いたことがある。
- 36 ロンドンに上京したばかりの貧乏なギッシングは、光熱費節約のために大英博物館の読書室で熱心に仕事をしていた。
- 37 当時の作家協会の機関誌(*The Author*)の第2巻第1号(1891年6月1日発行)に掲載された編集者ベザント(Walter Besant, 1836-1901)自身による書評。
- 38 1962年にボストンのHoughton Mifflin社から出版された『三文文士』に付された編者Irving Howeの序文。
- 39 ギッシングはロシアの作家たちの作品を読んで得た知識によって、ロシアの精神性をイギリス帝国主義の解毒剤とした。トルストイに献本した『命の冠』では、ギッシングの反軍国主義的態度が18世紀ロシアの無教会派の平和主義的な霊の戦士(Dukhobor)を通して示される。また、ギッシングが何回も読んだツルゲーネフ(Ivan Sergeyevich Turgenev, 1818-83)の『父と子』(1862)では、合理主義思想を信奉して如何なる種類の信仰も受け入れない主人公バザロフの態度が、『流謫の地に生まれて』におけるピークの道德問題に甚大な影響を与えている。詳しくはCoustillas, *Gissing and Turgenev* (1981)を参照。
- 40 スミス・エルダー社と違って、ロレンス・アンド・ブリン(Lawrence & Bullen)は正直な出版社で、政治小説『デンジル・クウォリア』に対して100ポンドの内金と売上げの6分の1の印税を提示した。その後もギッシングの初期小説群を廉価版で出版するなど、それなりに彼を儲けさせてくれた。
- 41 1893年5月15日、ギッシングはロンドンのブリクストン(76 Burton Road, Brixton)に家を借り、そこへ6月末に引っ越したが、仕事のためにケンジントンの屋根裏部屋もまた別に借りていた。
- 42 1893年4月16日付けのベルツ宛ての手紙(*Letters* 5: 105)を参照。
- 43 *Illustrated London News* と *English Illustrated Magazine* の編集長だったショーター(Clement King Shorter, 1857-1926)との短篇小説の契約は、ギッシングに商業ベースでの道を切り開いてくれた。
- 44 『三文文士』の第4章で、エドウィン・リアドンの妻は「もう長篇小説の時代ではないので、誰でも喜んで読むような短篇小説を書くこと」を夫に勧めている。
- 45 「作家協会」はThe Incorporated Society of Authors, Playwrights and Composersの略称。1884年、作家の著作権その他を保護する目的で、ウォルター・ベザントによって設立された。
- 46 オマル・ハイヤーム(Omar Khayyám, 1048?-1122)はペルシャの数学者、物理学者、天文学者、医学者、哲学者。西洋では英国人のEdward FitzGeraldによって1859年に翻訳された四行詩『ルバーイヤート』(*The Rubáiyát*)の作者として有名。この文学愛好者のディナー・クラブは、1895年12月に会員となったギッシングにとって、生涯で最も重要な社交の場であった。
- 47 ウェルズ(Herbert George Wells, 1866-1946)は幅広い自然科学の知識によって

- 独特の想像力を生かした科学小説で文名を確立し、第1次世界大戦後に文明批評や民衆啓蒙の書を發表し、世界国家建設の理想を主張した。ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) は、故郷を舞台とした一連の「ウェセックス小説」で知られ、近代機械文明の前に衰退していく田園と人々の悲劇的運命について、故郷の自然美を背景として描いた。人間の意志は宇宙に内在する盲目的意志によって支配されているという宿命観が作品の底流をなしている。クロッド (Edward Clodd, 1840-1930) は銀行家であったが、1884年にジョンソン協会、1892年にオマル・ハイヤム・クラブの設立に尽力し、オールドバラ (Aldeburgh, Suffolk) の自宅で当時のほとんどの著名人を客としてもてなした。
- 48 例えば、1897年6月27日発行の *New York Tribune Illustrated Supplement* の匿名批評家は、「ギッシング氏は最もよい意味でのリアリズム作家だ。芸術のためのリアリズム作家ではなく、実物のためのリアリズム作家である」と述べている。
- 49 1902年2月の初め、イーディスと次男アルフレッドの面倒を見てくれたミス・オーム (Eliza Orme, 1848-1937) からの手紙で、ギッシングは妻が保護されて精神病院に収容されたことを知った。イーディスは病院に収容されたまま1917年に死亡した。
- 50 ギッシングがイーディスについての悩みを手紙で最も多く伝えた相手は、3歳年下のクララ・コレット (Clara Elizabeth Collet, 1860-1948) である。1892年3月に「ジョージ・ギッシングの小説」と題した講演をロンドンで行ない、『余計者の女たち』に関心を持った彼女は、翌93年7月にギッシングと会うことができた。ロンドン大学で経済学の学位を取った最初の女性であるコレットは、知的に優れて自立した「新しい女」としてギッシングの気に入られた。彼が死ぬまで誠実な友人として陰に陽に力になってくれ、最後はアルジェノンと共に遺言執行者に指定された。
- 51 1896年8月9日の日記を参照。ギッシングは長男ウォルターが「気むずかしく、嘘つきで、生意気で、驚くほど利己的で」(Diary 418) あるのは、両親の不和を感じ取っているからだとして記している。
- 52 1897年9月22日、ギッシングは3度目のイタリア旅行に出発し、25日にシエナ (Siena) に着いた。シエナはイタリア中部の都市で、12世紀から14世紀にかけての聖堂やシエナ派の絵画など、歴史的建造物や文化財に富む。
- 53 出版社 (Methuen) は版權の切れたディケンズの小説11巻をロチェスター版 (Rochester Edition) として出版すべく、それぞれの序文 (3,000語) に対して10ギニーをギッシングに支払った。
- 54 ギッシングが旅行のためにナポリを出発したのは1897年11月16日。カラブリア (Calabria) はイタリア半島南端の州で丘陵と山地が多い。マグナ・グラエキア (Magna Graecia) は「大ギリシャ」の意で、南イタリアに紀元前8世紀頃から古代ギリシャ人によって建設された植民市群を指す。
- 55 コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, 1859-1930) は、開業医をしながら私

- 立探偵シャーロック・ホームズが活躍する一連の探偵小説を発表し、本格的推理小説というジャンルを確立した。ギッシングが彼と H・G・ウェルズにオマル・ハイヤーム・クラブで初めて会ったのは 1896 年 11 月 20 日。
- 56 5 月 6 日にギッシングが家を借りたサリー州のドーキング (7 Clifton Terrace, Dorking) は、ロンドンの南南西約 35 キロにある古くからの市場町。ギッシングはイーディスの訪問と手紙を避けるために数人の友だちにしか住所を知らせなかった。この町の北側 (Box Hill) には再婚したメレディスが死ぬまで住んでいた家がある。
- 57 ギッシングは “The Golden Trust” という劇に 1 ヶ月以上かけて挑んだが、結局は第 1 幕しか書けなかった。
- 58 41 歳のギッシングがマルセイユ港の税関所長オーギュスト・フルリ (Auguste Fleury) の娘、ガブリエル (Gabrielle Marie Edith Fleury, 1868–1954) に初めて会った時、29 歳の彼女は流暢な英語に加えてドイツ語とイタリア語にも通じ、ピアノに熟達した美しい声の持ち主であった。本書第 2 章の表紙を参照。
- 59 ギッシングとガブリエルが彼女の母 (Anna Fleury) と一緒に住んだ家は、ブローニュの森に近い (13 rue de Siam, Passy) 大きな現代風のアパート。
- 60 肺気腫 (emphysema) は弾力性を失って異常に膨張した肺の状態。中年以上の男子に多い。
- 61 子供時代の学友で医者になったヘンリー・ヒック (ギッシングの父に自分の店を売った薬剤師 Matthew Bussey Hick の息子、1853–1932) に勧められて、ギッシングは 6 月の第 3 週に療養所に入り、しばらくは体重も増えて健康を取り戻した。
- 62 サン・ジャン・ド・リューズ (St.-Jean-de-Luz) はスペインとの国境に近いピレネー山脈の麓にあるフランス南西端の海辺の町。隣接する村シブール (Cibourne) でギッシングはビスケー湾 (Bay of Biscay) を見下ろす大きな家具付き別荘の 1 階を借りた。作曲家ラヴェル (Maurice Ravel, 1875–1937) は同村の生まれ。
- 63 モンテ・カッシーノ (Monte Cassino) はイタリア中部、カッシーノ西郊にある修道院で、530 年頃に創設されたベネディクト修道会の本山。
- 64 ギッシングは暑気を避けるために海岸から離れた隣町のサン・ジャン・ピエ・ド・ポール (St.-Jean-Pied-de-Port) へ引越したが、7 月には更に健康によい気候を求めてカンボ・レ・ブラン (Cambo-les-Brains) へ、そしてピレネー山脈の麓にあるイスブール (Ispoure) へ移った。ギッシングが死んだのは午後 1 時 15 分で、直接の死因は心筋炎 (myocarditis) であった。
- 65 『自伝の試み』(Experiment in Autobiography) の第 8 章に加え、ウェルズは『トノ・バンゲイ』(Tono-Bungay, 1908) の中で語り手の叔父 (Edward Ponderevo) が南フランスの隠れ家で臨終を迎える場面についても、ギッシングの死を看取った時の記憶をもとに描いている。
- 66 ギッシングに英国の雑誌をあげて仲よくなっていたサン・ジャン・ド・

- リューズのクーパー師 (the Reverend Theodore Cooper) は、この報告を *Church Times* (1863 年創刊の Ангロカトリック派の新聞) に書き送って発表した。
- 67 ロバーツは 1904 年 1 月に『チャーチ・タイムズ』へ送った短信の中で、一生ギッシングは神学上の教義に敵対していたと述べた。
- 68 ガブリエルはサン・ジャン・ピエ・ド・ポール以外で英国国教会の儀式に従った埋葬を望んだ。
- 69 2 つの随筆は、1900 年 1 月に雑誌 *Literature* に掲載された “The Coming of the Preacher” と、オーエンズ・カレッジ時代に A. W. Ward 教授へ提出した “The English Novel of the Eighteenth Century” という題のレポート。
- 70 *The Pall Mall Gazette* の編集長 (Edward Tyas Cook) に宛てた 1892 年 9 月 10 日付けの手紙 (*Letters* 5: 53) を参照。
- 71 *The Humanitarian* の編集長 (William Walker Wilkins) に宛てた 1895 年 5 月 19 日付けの手紙 (*Letters* 5: 334) を参照。
- 72 例えば、*The Spectator* 誌の 1891 年 5 月 30 日号に載った匿名批評家による『三文文士』の書評では、「救いがたいほど陰鬱で読者の気力をくじく」が、「どのページにも情け容赦ないリアリズムの力がみなぎっている」と述べられている。
- 73 例えば、ギッシングの文学的資質の分析および彼と主要なヴィクトリア朝作家たちとの比較を行なったアドリアン・ブールや、ギッシングの小説に見られるイデオロギーの要素をマルクス主義の立場で分析したジョン・グッドなど。
- 74 『タイムズ文芸サプリメント』(*The Times Literary Supplement*) は通称 TLS で知られる英紙 *The Times* の別売週刊補遺。1901 年に月刊で始まり、現在の発行部数は 3 万弱で、英国の代表的な文芸誌。
- 75 ウルフ (Virginia Woolf, 1882–1941) は 1920 年代における新文学の開拓者の一人で、代表作『ダロウェイ夫人』(*Mrs Dalloway*, 1925) や『灯台へ』(*To the Lighthouse*, 1927) では、人物の意識の流れを鮮やかな内的現実へと開花させた。
- 76 P. J. Keating, *The Working Classes in Victorian Fiction* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971) 52–53.
- 77 George Orwell, “George Gissing,” *Collected Articles on George Gissing*, 54. オーウェル (1903–50) は全体主義的権力国家の恐怖を痛烈に諷刺する寓意小説『動物農場』(*Animal Farm*, 1945) や空想未来小説『1984 年』(*Nineteen Eighty-Four*, 1949) の他に、イギリス帝国主義の圧政を非難する小説、スペイン内戦体験記などの随筆や評論を書いた。
- 78 Walter Allen, *The English Novel: A Short Critical History* (London: Phoenix, 1954) 275–76. アレンが挙げた 3 つの作品とは『ヘンリー・ライクロフトの私記』、『三文文士』、『サーザ』。
- 79 Halperin 2–3.